

「裁くことから解放されたい」

1 だから、ああ、すべて人をさばく者よ。あなたには弁解の余地がない。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めている。さばくあなたも、同じことを行っているからである。2 わたしたちは、神のさばきが、このような事を行う者どもの上に正しく下ることを、知っている。3 ああ、このような事を行う者どもをさばきながら、しかも自ら同じことを行う人よ。あなたは、神のさばきをのがれうると思うのか。4 それとも、神の慈愛があなたを悔改めに導くことも知らないで、その慈愛と忍耐と寛容との富を軽んじるのか。5 あなたのかたくなな、悔改めのない心のゆえに、あなたは、神の正しいさばきの現れる怒りの日のために神の怒りを、自分の身に積んでいるのである。6 神は、おのおのに、そのわざにしたがって報いられる。7 すなわち、一方では、耐え忍んで善を行って、光栄とほまれと朽ちぬものを求める人に、永遠のいのちが与えられ、8 他方では、党派心をいだき、真理に従わないで不義に従う人に、怒りと激しい憤りとが加えられる。9 悪を行うすべての人には、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、患難と苦悩とが与えられ、10 善を行うすべての人には、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、光栄とほまれと平安とが与えられる。11 なぜなら、神には、かたより見ることがないからである（ローマ2章1節－11節）。

故三浦綾子さんが「裁きの家」という小説のあとがきにこんなことを書き残しています。「家庭は裁判所ではないはずだ。しかし現代においては、家庭もまた裁きあう場所ではなくなっている」。家庭とはすなわち家族が集まる場所です。本来、一番、親しくしている者が共に集う場所です。しかし、その家庭が裁きの場になっていると三浦さんは言うのです。この言葉が本当であるならば、私達には息つく場所はありません。家族メンバーは一人、そしてまた一人と自分が裁かれることのない場所を求めて、その心は家庭から遠のいていくことでしょうか。でも実際、家庭以外のどこで互いに裁き合わない場所を見つけることができるのでしょうか。

裁判所に行くのが楽しくて仕方のない人はいないと思います。私もアメリカに来て何度か陪審員の通知をいただきました。これは米国民の義務ではありますが、心のどこかで「陪審員にはなりたくない」という気持ちがあります。なぜなら自分は見知らぬ人の人生に大きな影響を与える場所に立ちえないし、立ちたくないと思うからです。

しかし、一方、こんなことも思います。この国では本物の裁判をテレビで映したり、映画やドラマの中にも法廷を舞台としたものが多く、そこには多くの視聴者がいます。私達はそれを見ながら、自分なりにどちらが正しいのか、どちらが正しくないのか心の中でジャッジしているのでしょうか。傍観者として人を裁くというようなことを私達は心のどこかで望んでいるのかもしれませんが。

私達は人から裁かれないとは思いません。私はこれまで「私は裁かれるのがたまらなく好きなんです」と言っている人に出会ったことがありません。しかし、今日は「裁かれる」ということではなく、自らが「裁く」側に立つということはどういうことなのかということに注目をしたく願っております。聖書は「裁かれる」ということについても書き記し、同時に「裁く」ということについて私達に語りかけています。いくつかのことを見てまいりましょう。まず最初に「私達は互いに何も知らない」ということです。

私達は互いに何も知らない。

聖書の中のヨブ記を読まれたことがある方も多いことでしょう。そこに記されていますヨブという人について聖書は開口一番、『そのひととなりは全く、かつ正しく、神をおそれ、悪に遠ざかった』（ヨブ1章1節）と記しており、彼には10人の子があり、所有している財産も多く、彼は『東の人のうちで最も大いなる人であった』（ヨブ1章3節）と書かれています。

その彼に災いが起き、その全ての子達を失い、所有する財産も全て失い、果てには自分自身、足の裏から頭の頂まで皮膚病にかかり、灰の中に座すようになりました。その哀れな夫の姿を見た彼の妻は「神をのろって死になさい」とまで言います。

このヨブ記の命題は「正しい人がなぜ災いに遭うのか」ということであり、彼はこのことについて友人たちと議論を交わすというのがこのヨブ記です。しかし、その議論は平行線をたどり、誰もが納得のいく答えを見出すことができません。そして、その最後にいたり、それまで沈黙を保っていた神がつむじ風の中、ヨブに語りかけます。

その語りかけを一言で言いますと「あなたは世界の森羅万象について、その全容を知っていて、説明できるか」というものでした。それらの言葉を聞き、ヨブは神の前に自分の無力さを知り、へりくだり、悔い改めるのです。そう、彼はこの

世界についてこれっぽっちも何も知らなかったのです。そして言います『わたしは自ら悟らない事を言い、みずから知らない、測りがたい事を述べました』（ヨブ42章3節）。

「私はあなたのことは何でも分かっているのよ」としたり顔で言われる方が時々、います。しかし、それは間違っていると思います。私たちは互いの全てを知ることなどできないのです。それが夫婦であっても、親子であっても、私達は互いのことを完全に知ることなどはできないのです。

ヨハネによる福音書4章にはイエスがサマリアのスカルの井戸で一人の女に出会ったことが記録されています。二人の間に会話がなされ、この女について一つのことを明らかになりました。それは「彼女にはかつて5人の夫がいたが、今、共にいるのは正式な自分の夫ではない」ということでした。

このような話を聞くと、私達は色々なことを想像します。ある人はこの女性に対して「なんとルーズな人なのか」とか「なんと飽きっぽいのか」と思われるかもしれません。そして、このような場合、人が考えるイメージは決していいものではありません。

しかし、私達は一つのことを忘れてしています。それは、この女性に対して私達が知っていることは「かつて彼女には五人の夫がいて、イエスと出会った時には別の男性と暮らしている」ということだけなのです。その女の名前すら聖書は記録しておらず、その女の生まれはどこで、どんな親に育てられ、五人の男達はどんな者達であったのか、子供はいるのか、今、付き合っている男とはどんないきさつがあったのか、これらのことについては何も私達は知りません。しかし、私たちは「かつて5人の夫がいて、今は・・・」などと聞くと、鬼の首を取ったかのように「この女は・・・」と断言的なことを言い始めるのです。裁きが始まるのです。私達の評価とかジャッジメントというのはこのような状況でなされているのです。

しかし、聖書は唯一、私達の全てを知っている方がいるといます。詩篇139篇1節—4節にはこんなみ言葉が書かれています「主よ、あなたはわたしを探り出し、わたしを知り尽くされました。あなたはわが座るをも立つをも知り、遠くからわが思いをわきまえられます。あなたがわが歩むをも、伏すをも探し出し、わがもろもろの道をことごとく知っておられます。わたしの舌に一言もないのに、主よ、あなたはことごとくそれを知られます」

主は私達の全てを知っているのです。私達が誰にも明かすことができない心、いや、もしかしたら自分自身ですらも忘れてしまっている心の古傷、それらを知っていて下さるお方が神だと聖書はいうのです。このことは我々にとりまして大きな慰めです。この場合、知られているということ、それは受け止められていることを含んでいるからです。私達は「私はこんな者で、こんな生涯を送ってきまして・・・」などと説明する以前からこのお方は私達のことを知っていてくださいます。

しかし、同時にこのお方が私たちを知り尽くしているということは、私達が人に知られることなく持っている心の中の様々な罪というものをもこのお方は知っているということです。ということは、このお方だけが私達のことをジャッジすることができる唯一の存在です。そのジャッジとは私達の全てを知っているという前提に立ってなされるものです。このことを私達が知ることはとても厳粛なことです。このことを踏まえて、パウロはこう書き残しました。

『3 わたしはあなたがたにさばかれたり、人間の裁判にかけられたりしても、なんら意に介しない。いや、わたしは自分をさばくこともしない。4 わたしは自ら省みて、なんらやましいことはないが、それで義とされているわけではない。わたしをさばくかたは、主である。5 だから、主がこられるまでは、何事についても、先走りをしてさばいてはいけない。主は暗い中に隠れていることを明るみに出し、心の中で企てられていることを、あらわにされるであろう。その時には、神からそれぞれほまれを受けるであろう』（コリント第一の手紙4章3節～5節）。

ここでパウロは人に裁かれたり、実際に裁判の被告人席に立たされても、自分は一向に意に介さないと言いました。なぜなら、自分を本当に裁くことができるのは神だけだということを彼は知っているからです。そして、同時に自分をも彼は裁かないというのです。私達は自分のことすら完璧に知ることができないからです。自分をいつも裁いている人はいませんか。「被告」と「裁判長」がいつも心に同居している方、そんな生き方をこれからも続けますか。このようなことを続けますのなら、やがて心が引き裂かれてしまいますでしょう。そこからの解放を聖書は告げているのです。

パウロははっきりと書いています。わたしを裁く方は主だけであると。そうです、私達はいつか主の前に出なくてはなりません。アリバイとか、物的証拠とか、そんなことを言っている場合ではないのです、全てが明らかなのですから。表向き

は恰好つけていても、全ての人があの人には偉人だと言ったとしても、その心の臆測にあるその人の動機まで見通されましたら、果たして私達は胸をはって神の前に立つことができますでしょうか。二つめのこと、それは「私達には偏見がある」ということです。

私達完全に公平になることはできない

私達は完全に公平になることなどできないのです。昔、ギリシアでは特に重大な裁判は暗い所で行ったといえます。すなわち判事も審査官も被告を見ずに、ただ事実にだけ基づいて裁判するためです。顔が見えてしまったら、人間は感覚的な生き物ですから、その人の表情や仕草によって、判決に自分の主観が入ってしまうからです。

イサクとリベカという夫婦の話が聖書の中に書かれています。彼らには双子の男の子がいたのですが、彼らはその我が子をそれぞれ偏り愛しました。すなわち父、イサクは兄エサウを、母リベカは弟ヤコブを。そして、母に偏愛され育ったヤコブが成人して子供をもうけた時に、彼は自分の12人の子供のうち、ヨセフを偏り愛しました。最も純粋に公平な心で見ると思われる我が子ですら時に、私達は公平に彼らを見て向き合うことができないのです。

ということは、親友が自分が嫌っている人との間にイザコザを起こした時、私達はその二人の間に立ったとしたら、事実に基づいてそのイザコザを見ることは私達には難しく、公平にその間を取り持つことができなくなります。これらに加えて私達は二人のことを完全に知りえないのですから、彼らを正しく裁くことは不可能なのです。

しかし、9節—11節にはこう書かれています「悪を行う全ての人には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、患難と苦悩とが与えられ、善を行う全ての人には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、光栄とほまれと平安とが与えられる。なぜなら、神には、かたより見ることはないからである」。

ここにはユダヤ人もギリシア人も、すなわちいかなる人間も公平にかたより見ることはない神がいると書かれています。この神はそれがユダヤ人であっても、ギリシア人であっても、公平にそれらの人達を裁くというのです。アメリカ人も北朝鮮人もイギリス人もアフガニスタン人も神の前に公平に裁かれるのです。

ここにも私達は慰めを見出します。それは、私たちが人から公平に見られることのない世界に生きているからです。莫大な報酬を払って法律をかいくぐる弁護士を雇える人、そんなことはできない人、人間の下すジャッジに完全な公平さはありません。このように財力や地位、性別、年齢によって我々のジャッジは偏ることがありますでしょう。このような世界で不当な取り扱いを受けている人。いつも自分の人生は貧乏くじばかりだと思っている方。神も仏もないのかと思われている方々、結論を出すのは早いのです。このお方は必ず公正に私たちを裁かれます。誠に人を裁くことができるのは神のみです。最後のこと、それは「我々は人を裁くことできるほど正しくない」ということを見てまいりましょ。；

私達は人を裁くことができるほど正しくない。もし人を本当に裁くことができる人がいるとしたら、その人は完全に正しい人であるべきです。そういう意味で世界の国々でなされている裁判というものも100%公平で正しい裁きであるということを断言できる人はいないでしょう。

実は今日、見ておられます聖書箇所は律法学者やパリサイ人に向けて書かれたと言われています。そうです、彼らは律法を厳格に守る宗教家であり、律法の専門家です。すなわち彼らは自称、自分は義人だと思い込んでいた人達です。しかし、イエス・キリストはこのような人達に臆することなく向き合い、その偽善を指摘しました。

有名な箇所ですが、マタイ七章1節—5節にはイエスの言われたこんな例え話があります。①人をさばくな。自分がさばかれたいためである。②あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう。③なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか。④自分の目には梁があるのに、どうして兄弟にむかって、あなたの目からちりを取らせてください、と言えようか。⑤偽善者よ、まず自分の目から梁を取りのけるがよい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけることができるだろう。

皆さん、この箇所はチャレンジングです。中には「なんと無礼な言葉だ」と内心、穏やかではない人もいるかもしれません。そりゃそうでしょう。キリストは「あなたの目の前には梁がある」というのですから。梁とは家の屋根の太い横木です。そんな巨大な木材が自分の目の前にありながら、なぜ、誰かの目にある小さな小さな埃を何とかしろと言えるのかと言うのですから。

そして、こんな言葉を聞くと、それを逆手にとる方がいます。誰かから何かを注意されると「あなたは何様か。まず、あなたの梁を取ってから出直して来い」などとこれまた偉そうに言うのです。言うまでもなく、このようなことを私達は泥の塗り合いと言います。

それでは、私達は互いのことを思って、互いのチリを取り除けることはできないのでしょうか。いいえ、できるとパウロは言うのです。まず、自分の前の梁を取り除き、はっきりと見えるようになったらできるというのです。私達の梁は取り除けられます。何によっですか。イエス・キリストの十字架です。イエスはその梁のような十字架を背負って、カルバリの丘で十字架におかかりになりました。私達がこのイエスの十字架の光に照らされる時に、まず誰も私達は自分の目の前には確かに梁があることに気がつかされ、その梁はこのキリストの十字架によって取りのかれます。

このキリストの十字架の前に発つときに私達は神の前に何も隠すことができないということを知ります。このお方は私の全てを知っておられる。その時に、それまで地中に埋めて隠していたような罪が、ことごとく顕にされるのです。私達はそのことに驚き、それを前に自分は無力だということを知ります。しかしイエス様はその私達の罪の身代わりとなり、私達のために十字架にかかり、私達の罪の代価を全て払ってくださいました。こうして私達は神の裁きから除外されたのです。そのためにキリスト血が代償として支払われたのです。

言うまでもなく、そこに私達の努力や償いは何もありません。100パーセント、それは私達に対するキリストの自発的な愛によるのです。ということは、こういうことです、私達の目の前の梁がこのキリストの十字架によって取り除けられ、私達の目が開かれた時に私達が見えるようになるものは私達のために撃たれたキリストの手と足の釘跡なのです。ですから我々の梁が除けられたことに対して私達が自分を誇ることは何もないのです。

私の神学校時代の恩師、小林和夫先生がこのようなことを書いています。

『実は一番、キリストの福音にとって始末の悪い人は、自分が罪を認めず、罪人であるという自覚を持っていない人です。一番厄介な、一番、神に近そうで遠くにいる人というのは、「わたしは正しいのだ」と思っている人です。それが実は一番神に遠いところの、一番神には厄介な人なのです。これは逆説的ではありませんが、まさに聖書が言うところの真理だと思えます。神の福音に一番近い人と

いうのは、自分の真相を知って、自分が癒されなければならない病人である、罪人であるということを理解する人です。自分の恐ろしい罪を思い起こして、「これがわたしの実体だ」ということをつかんだ人の方がよほど神に近い。そんな事はわたしには関係がない。そんなことはあの人の事だと頭の上を通り過ぎさせて、胸をなでおろす人、自分は少なくともそういう人間ではないと思う者の方が、よほど神に遠いのだということを教えています。そして、イエス様は私達、罪人をこよなく愛してくださったのですが、そのイエス・キリストが一番、お嫌いになった存在というのは、自分を正しい者と主張して譲らない態度を持っている魂なのです。神の前に人間という存在は自分の真相を認めたらそんなに大手を振って歩けたり、「わたしには罪がない」と言うことができる存在ではないはずなのに、その自分の罪の姿に目をつぶって、自分は正しいとする自称義人をイエス様が一番、嫌いなさったのです。どんな事をした人間でもどんな修行をしている人間でも、一枚面の皮をはがしたら全部同じなのだというのが、神の前から見た人間の姿なのです』（『福音の輝き』小林和夫）

神の前に人は一枚、面の皮をはがしたら全部同じだということ、私達の梁が取り除けられた時、私達に見えてくる光景はそんな光景であり、そのような人の先頭に立つ者が自分なのだということに気がつかされるのです。そうになりました時に初めて、私達は謙遜に人の塵すらも取り除けさせていただくことができるようになるのです。

今日は3つのことを見てきました。「私達は互いに完全に知りえない間柄である」こと、「私達は完全にフェアであることはできない」こと、「私達は人を裁くことができるほどに正しくない」ということです。私達はこれらに該当する者です。すなわち、私達は人を裁くことなどできないのです。それは私達の仕事ではないのです。自分が託された事ではないことをするという事は、そのことに当たる主に対する越権行為となるのです。

そして、これら「我々は裁きの場に立つ者ではない」ということは実のところ、その裁かれる人に対するグッドニュースなのではなくて、私達自身に対するグッドニュースだということに私達は気がつかされます。時に私達は人を裁くことにより、その心が閉ざされ、真実を見ることができなくなります。その視野は狭くなります。怒りや苛立ちを覚えます。偽りの優越感に浸ります。これらのことに私達は捕らえられています。しかし、イエス様はマタイ11章28節-30節であの有名な言葉を語りました。

2017年8月20日 「裁くことから解放されたい」

『28 すべて重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。29 わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである』 (マタイ11章28節-30節)。

実のところ、この言葉が意味するところの一つは私達が人に裁かれる、人を裁くという重荷からの休息を私達に約束するものなのです。「主だけが私達を公平に裁かれる。私達は裁きの場に立つことなどできない。主は私達が受けるべき裁きを全てその身代わりとして受けてくださった」。この宣言は実のところ、私達を解放する宣言なのです。お祈りしましょう。